

平安文学における七夕*

赤間恵都子**

1. 七夕のうた…漢詩と和歌

七夕は、中国から伝来した星合伝説と技芸の上達を願う乞巧奠に、日本古来の棚機津女たなばたつめを祀る風習が融合した行事である。五節日の1つとして位置づけられ、厄払いや願掛けの行事として親しまれると同時に、年に一度の逢瀬というロマンスが平安文学に受け入れられた。宮廷や有力貴族の邸で行われた七夕の宴では、漢詩や和歌が毎年詠まれ、多数の七夕詠が後世に遺された。

日本最古の漢詩集である『懐風藻』には、五言七夕の詩が6編撰ばれている。史書に見える最初の宮廷七夕宴は天平6年(734)7月だが、『懐風藻』にはそれ以前の七夕詠があり、七夕行事が日本の宮廷で始められたのは、天智天皇の近江朝(667~672)あたりからだと考えられている⁽¹⁾。

一方、現存最古の和歌集である『万葉集』にも、『柿本人麻呂歌集』所出とされる七夕歌群をはじめ、130首以上の七夕歌が収められている。

次に、『懐風藻』の七夕詩を2編と、『万葉集』からいくつかの歌を掲げよう⁽²⁾。

○『懐風藻』

従五位下出雲介吉智首⁽³⁾

五言。七夕。一首。

冉冉ぜんぜんと逝ゆきて留とどまらず、時節ときせふ忽たちち秋あきに驚おどく。

菊風きくかぜ夕霧ゆふきりを披ひらき、桂月けいげつ蘭洲らんしゅうを照てらす。

仙車せんしゃ鵲せき橋はしを渡わたり、神駕しんが清流せいりゅうを越こす。

天庭てんてい相嘉さうかを陳ちんべ、華閣かかく離愁りしゅうを積とく。

河横かおうたわり天曙あけんと欲ほし、

更さらに嘆なげく後期こうきの悠はるかなるを。

(現代語訳)

時は移り過ぎて留まらず、時節はたちまち秋を迎えたことに驚く。

* Tanabata in Japanese classical literature of the Heian Era

** Etsuko Akama 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)

キーワード：七夕 平安文字

菊の花に吹く風が夕霧を分け、月は蘭の香る中州を照らしている。
 仙人の車がかささぎの橋を渡り、その神の乗物は清流を越える。
 天上の庭で再会の喜びを語り、華麗な楼閣で別れの悲しみを解きほぐす。
 天の河が横向き様になって、空が明けようとする、
 2人は次に逢える時が遙か先であることをいっそう嘆く。

大学頭従五位下山田史三方⁽⁴⁾

五言^{しちせき}。七夕。一首。

金漢星榆^{せいゆ}冷え、銀河月桂の秋。

霊姿雲鬢^{うんびん おさ}を理め、仙駕^{せんが}清流を渡る。

窈窕^{ようちよう}衣玉^{いぎよく}を鳴らし、玲瓏^{れいろう}彩舟に映ず。

悲しむ所^{あくるひ}は明日の夜、誰か慰む別離の憂い。

(現代語訳)

秋空の天の川では星々が冴えわたり、銀河に月が照り輝く秋。
 麗しい織女は髪を美しく整え、仙人の乗り物で天の川の清流を渡る。
 たおやかな美女は衣の飾り玉を鳴らし、涼やかな姿が彩られた舟に映る。
 悲しむべきことは、明日の夜明け、誰が別離の嘆きを慰められるだろうか。

○『万葉集』

- 2015 我が背子にうら恋ひ居れば天の川夜舟漕ぐなる梶の音聞こゆ
 2044 天の川霧立ち渡り彦星の梶の音聞こゆ夜のふけゆけば
 2052 この夕べ降り来る雨は彦星のはや漕ぐ舟の櫂の散りかも
 2056 天の川打橋渡せ妹が家道止まず通はむ時待たずとも
 2064 古に織りてし服をこの夕衣に縫ひて君待つ我を
 2081 天の川棚橋渡せ織女のいざ渡らさむに棚橋わたせ
 3900 織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ちわたる

『懐風藻』と『万葉集』の七夕詠を見ると、中国から伝来した七夕伝説が、日本に入って変容していった過程が推し量られる。『懐風藻』では、織女が天の川を渡って牽牛に逢いにいくという中国唐代の伝説を受け継いだ漢詩が詠まれている。『万葉集』でも2081、3900番の2首はそうだが、その他は、2044、2052、2056番のように、牽牛の方が天の川を渡る歌になっていく。2064、2015番のように、織女の歌が牽牛の訪れを待つ立場で詠まれているのは、日本古代の通い婚の風習に合わせたためである。ちなみに和歌では、牽牛は彦星と詠まれており、漢詩では、織女と牽牛の2人は神仙とされている。

2人が川を渡る手段としては、中国の漢詩ではカササギが渡す橋の上を車に乗って行くのだが、『懐風藻』では、カササギの橋を渡る詩(吉智首の詩など)と舟で渡る詩(山田史三方の詩など)があり、『万葉集』では舟で渡る歌の方が定番となっている⁽⁵⁾。なお、『万葉集』にも1首(2081番)だけ、舟でなく、棚橋(板を棚のように渡した簡略な橋)を織女が渡る歌が

あるが、カササギは家集中のどこにも登場しない⁽⁶⁾。

『万葉集』以降も膨大な数の七夕歌が詠まれているが、それらの和歌を分析する余裕はないので、ここでは三代集から恣意に3首ずつ掲げた⁽⁷⁾。

○『古今集』

- 178 契りけむ心ぞつらき七夕の年にひとたび逢ふは逢ふかは
 179 年ごとに逢ふとはすれど七夕の寝る夜数は少なりけむ
 181 今宵来む人には逢はじ七夕の久しきほどに待ちもこそすれ

○『後撰集』

- 231 恋ひ恋ひて逢はむと思ふ夕暮れはたなばたつめもかくやあるらし
 237 逢ふことの今宵過ぎなば織女に劣りやしなむ恋はまさりて
 238 織女の天の門渡る今宵さへ遠ち方人のつれなかるらむ

○『拾遺集』

- 142 彦星の妻待つ宵の秋風に我さへあやな人ぞ恋しき
 150 一年に一夜と思へどたなばたの逢ひ見む秋の限りなきかな
 153 逢ひ見ても逢はでも嘆くたなばたはいつか心のどけかるべき

年に一度の逢瀬しかない七夕の恋に同情し、現実における恋と比べて詠むのは、平安時代に特に多く見られる詠み方である。男性作者しかいない漢詩とちがって、和歌には女性の思いが投影される。いつ訪れるかしのれない相手を待つ女性にとって、牽牛を待ち続ける織女の思いは共感しやすく、また現実には味わいたくない状況でもあったろう。一方、男性貴族たちにとっても七夕は、なかなか逢えない相手との恋になぞらえて詠むのにうってつけの素材だった。七夕の和歌は平安文学に馴染みやすかったと考えられる。

2. 物語等に見える七夕

(1) 『宇津保物語』の七夕

平安時代、和歌に遅れて成立した物語文学では、七夕を取り上げる例が意外に少なく感じられる。そんな中、『宇津保物語』には七夕行事の具体的な描写が複数あり、注目される⁽⁸⁾。

かくて、七月七日になりぬ。賀茂川に、御髪洗ましに、大宮よりはじめてまつりて、小君たちまで出でたまへり。賀茂の河辺に棧敷打ちて、男君たちおはしまさうず。その日、節供河原にまるれり。君たち御髪洗ましはてて、御琴調べて、七夕に奉りたまふほどに……

君だち、御琴どもかき合はせて遊ばすほどに、彦星の天の川渡るを見たまひて、式部卿の宮の御方、

白露の置くと見し間に彦星の雲の舟にも乗りにけるかな
 中務の宮の御方、

秋浅み紅葉も散らぬ天の川何を橋にてあひ渡るらむ

〔藤原の君〕

かかるほどに、七月七日に、……御前の前栽、松の下に、反橋、浮橋を渡しつつ、色々の糸どもを、一つづつ七夕に奉る。次ぎて、簀子に蒔絵の棚厨子七つ立てて、廂に御簾かけ並べ立てて、よき削り棹渡して、色々の御衣ども、色を尽くし、解きほどこき、御衣架を並べ、御調度、色を尽くし、品を調べ、御鬘ども丈を整へ、数を尽くして、方々栄されたり。風に競ひてももの香ども吹き加へぬところなし。

……朝廷の詩作聞こし召すとて、博士、文人八十余人、仁寿殿に参るべきを、おほやけのにはかにとどまりぬ。「さうざうしきわごかな。例よりも興あるべき詩作なるべきを。ただに過ぐさじ。…

〔祭の使〕

「藤原の君」巻では、七月七日、女性たちが賀茂川の河辺に棧敷を設置して洗髪し、その後、河原で七夕の節供を行っている。まずは琴を演奏して七夕に捧げる。七夕の日の洗髪と琴の演奏の奉納は「楼の上-下」巻にも描かれており、日本古来の禊の行事としての性格が示されている。次に天の川を眺め、複数の人物が和歌をかわるがわる詠じ合う様子が語られる。詠歌が始まる契機となっている「彦星の天の川渡るを見たまひて」が、実際にどのような星空を見た時点を指すのか、天文学的な観測に基づいた記述なのかと、興味をひかれる。

「祭の使」巻では、着飾った童女たちが邸の中庭に色々の糸を掛け、縁側には色とりどりの着物を解いた布を掛け渡して飾りたてている様子が語られている。また、七夕の漢詩の詩作を行うために80人以上もの男性貴族が宮廷に参上する予定だったが、天皇の都合で中止になったこと、そのままでは気がすまなかった男性貴族たちは左大臣邸に場所を替えて詩作を行い、制作した漢詩を琴に合わせて朗詠し、夜を明かしたこと。さらに翌日は、左大臣家の娘の貴宮に七夕の和歌を贈ったこと等が語られている。

『宇津保物語』が成立した10世紀後半には、七夕が宮廷や公卿邸に年間行事として定着し、盛んに行われていた様子が推し量られよう。

(2) 『伊勢物語』の七夕

次に歌物語の代表作である『伊勢物語』第82段を見てみよう。

御供なる人、酒をもたせて、野よりいで来たり。この酒を飲んでむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まるる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり
親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ
かへりて宮に入らせたまひぬ。

惟喬親王が交野に狩に出かけたとき、天の河という所に至った。そこで、川のほとりで酒宴をし、親王の要望に応じて馬の頭（業平）が和歌を詠んだ。その歌が大変良い出来で、返歌がなかなか出来なかったが、紀有常⁽⁹⁾が織女の立場を押し量った歌を作って返した⁽¹⁰⁾。この天の河は実在の川である。偶然来合わせた川の名にちなんで七夕の歌が詠まれているので、七夕行事とは関係が無い。

七夕歌は第59段にもう1例あるが、水を掛けられ、蘇生した男の呼んだ歌として「わが上に露ぞ置くなる天の川とわたる舟の櫂の雫か」(『古今集』雑歌)が引かれるもので、七夕とはまったく関わりが無い。和歌を基に成立した歌物語では、七夕の和歌が引用されていても、行事そのものとは直結しない⁽¹¹⁾。そのことが、かえって面白がられている。それは七夕歌が歌自体として独立し、平安文学に浸透していた証なのだろう。

(3) 女流日記の七夕…『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』

七夕伝説は平安時代の通い婚の風習に重ねられ、恋愛をテーマとする女流日記文学にも取り入れられた。まず、結婚生活の不如意を綴った『蜻蛉日記』を見てみよう。

「明後日ばかりは逢坂」とぞある。時は七月五日のことなり。ながき物忌にさしこもりたるほどに、かくありし返りごとには、

天の川七日を契る心あらば星あひばかりのかげを見よとや
ことほりにもや思ひけむ、すこし心をとめたるやうにて月ごろになりゆく。

作者道綱母が結婚してから数年後の上巻の記事である。夫兼家と愛人との関係が、そろそろ終息に向かっているころだった。兼家から道綱母のもとに、七月七日に逢いに行くという便りがあった。これに対して道綱母は、七夕を引き合いに出し、年に一度の逢瀬で我慢しろということかと、切り返した。その後、兼家は少しは自分のことを心に留めているようだったと記している。日記には、七夕の歌が夫の気持ちを道綱母に向かわせたように書かれている。

次に、親王との恋愛をテーマに、2人だけの贈答歌で綴った『和泉式部日記』を見てみよう。

かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すきごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず。かかる折に、宮の過ぎさずのたまはせしものを、げにおぼしめし忘れにけるかなと思ふほどにぞ、御文ある。見れば、ただかくぞ、

思ひきや棚機つ女に身をなして天の河原をながむべしとは
とあり。さはいへど、過ぎしたまはぞめるはと思ふも、をかしうて、
ながむらむ空をだに見ず棚機に忌まるばかりのわが身と思へば
とあるを御覧じて、なほえ思ひはなつまじうおぼす。

7月7日、和泉式部宛に七夕にちなんだ多くの恋文が寄せられた。しかし、彼女が待っているのは敦道親王からの便りのみで、他のものは目に入らない。待ちかねた手紙には、男である

敦道が自らを織女にたとえて逢えないつらさを詠む歌が書かれていた。和泉式部は、親王が眺めているという空さえ見られず嘆くわが身の上を訴え、親王の心を動かした。

恋愛をテーマにした2つの女流日記では、作者自身が相手と逢えない状況を訴えるため、七夕伝説を和歌に利用し、それぞれの相手の気持ちをつかんでいる。彼女たちにとって七夕は、恋愛歌作成のための格好のアイテムだったといえるだろう。

(5) 『枕草子』の七夕

『枕草子』には、物語には描かれない平安貴族の生活の一端が記されている。たとえば五節日の天候を扱った章段からは、それぞれの季節の行事に対する細やかな感覚がうかがえる。

正月一日、三月三日は いとうららかなる。五月五日は、曇りくらしたる。

七月七日は、曇りくらして、夕方は晴れたる空に、月いと明かく、星の数も見えたる。

元日と桃の節供は春なので、穏やかに晴れた暖かな天候を、端午の節供は初夏で、菖蒲の香りが引き立つ曇りの天候を好ましいものとして提示する。七夕の日の天候については特に詳しく指定している。すなわち朝からずっと曇っていて、夕方になって晴れ、空に月がとても明るく出て、星もたくさん見えている状況がいいという。星合の空が曇っていると、せっかくの七夕が「すさまじきもの」になる。曇りの朝は、期待も半分に祈った結果、うまい具合に夕方から雲が切れ、星空が見えた時は一段とうれしいだろう。平安朝の人々もそんな風にして、毎年、七夕の夜を待ちかねていたのかと想像させられる。

次は、星を取り上げた章段である。

星は すばる。彥星。夕づつ。よばひ星少しをかし。尾だになからましかば、まいて。

古代の日本で、星の名前を意識して夜空を眺める機会が宮廷女房にあったのだろうか。最初の「すばる」は日本語で、しかも古語であることに驚く人が多いが、その「すばる」の次に掲げられるのが彥星である。七夕行事と結びついていたことは言うまでもない。次の「夕づつ」は宵の明星すなわち金星、「よばひ星」は流星で、尾がなければもっといいのという感想は面白い。

その他には、類聚段の「河は」の段に、先に取り上げた『伊勢物語』の「天の河原」が引かれている例と、「橋は」の段に「カササギの橋」が挙げられている例がある。日記段では、「故殿の御服のころ」の段に、宮中における七夕祭が記されており、内裏での行事を終えた後、殿上人たちが大内裏の太政官庁に滞在している定子後宮の女房たちを訪ね、漢詩を朗詠したことなどが見える⁽¹²⁾。そこからは、七夕が、貴族男女の交流の機会として楽しまれていた様子が推し量られる。

以上のように、『枕草子』からは、平安貴族社会で身近な行事として発展し、生活や文化に溶け込んでいた七夕の実態を読み取ることができる。

(6) 『源氏物語』の七夕

平安時代を代表する物語は七夕をどのように扱っているのだろうか。『源氏物語』には、七夕行事の記述が1例のみ、光源氏の晩年の姿を描く幻巻にある。

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星逢ひ見る人もなし、まだ夜深う、一ところ起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、七夕の逢う瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ

紫の上を失って悲しみの日々を送る光源氏にとって、例年の年中行事は何の意味もなさない。七夕行事が行われる秋は紫の上が亡くなった季節で、光源氏の歌の「わかれの庭」は、紫の上が最期に自らを庭の萩の露に例えて詠んだことを意味しているのだろう。七夕からは長恨歌の次の一節も想起される。

七月七日長生殿 夜半人無く私語の時
天に在りては願はくは比翼の鳥となり
地に在りては願はくは連理の枝と為らむと

玄宗皇帝と楊貴妃が、七夕の夜の2人だけの秘め事として、「比翼の鳥、連理の枝」となって常に一緒にいようと誓ったという詩句である。紫の上との思い出に浸る光源氏の脳裏には七夕のこの詩句が思い浮かび、彼はかつての父桐壺帝と同様、玄宗皇帝のように、常世の国に住む妻に使いを送りたいと願っただろう。『源氏物語』の中で七夕行事に触れる唯一の例は、光源氏物語の冒頭（桐壺巻）と末尾（幻巻）との照合を示唆している。

七夕行事があまり描かれないのは、作者があえて取り上げるまでもなく、七夕が当時の貴族文化に浸透していたからだと思われる。探してみれば、『源氏物語』には七夕に関わる記述がかなり見つかる。

まず、帚木巻のいわゆる「雨夜の品定め」で左馬頭が話した体験談には、次のような例がある。

「はかなきあだ事をも、まことの大事をも言ひあはせたるにかひなからず、竜田姫と言はむにもつきなからず、織姫の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべるべし。」とて、いとあはれと思ひ出でたり。

左馬頭が、かつて妻にしていた嫉妬深い女について、「どんなことでも相談しがいがあり、染物の腕前は竜田姫といってもいいくらいうまく、仕立物のほうもたなばた姫にも劣らぬくらい堪能だった」と言って、思い出している場面である。ここでは七夕の織女が裁縫上手な姫として、染物上手な立田姫と並んで引かれている。

次は、須磨巻で、光源氏が紫の上と別れ、舟に乗って須磨の浦に到着した場面である。そこ

には七夕の和歌が引歌として認められる。

うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の心地するに、權の雫もたへがたし。

ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲居か
つらからぬものなくなむ。

光源氏が後ろを振り返って見ると、本当に都から3000里も離れた場所にきた気持ちがした。彼は權の雫のように涙がこぼれ落ちるのをこらえきれず、歌を詠む。この「權の雫」という言葉には、『古今集』に採られる「わが上に露ぞ置くなる天の川門渡る舟の權の雫か」の和歌が踏まえている⁽¹³⁾。舟で彦星が川を渡るというのは、日本で定着した七夕伝説の型だった。光源氏が舟に乗り、最愛の妻紫の上と別れた状況が、その七夕の別れを想起させ、七夕の歌が引かれたのだろう。

同様に、舟に乗った男性が彦星に例えられる例が宇治十帖にも見える。総角巻で、紅葉狩りにかこつけて舟で宇治を訪れた匂宮の様子を描く場面である。

正身の御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。世人のなびきかしづきたてまつるさま、かく忍びたまへる道にも、いとことにいつくしきを見たまふにも、げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめとおぼえたり。

中の君に会いたくて、都から舟で宇治川を渡って来る匂宮が、彦星に例えられている。宇治の姫君に仕える女房たちは、匂宮一行のきらびやかな様子に圧倒され、たとえ彦星のように年に1回でもいいから待ち迎えたいと思うのである。しかし、匂宮は高貴な身分ゆえに自由に動けず、逢瀬はかなわなかった。

彦星のように、男君を年に一度通わせたいという表現は、この後も宇治十帖で2回繰り返される。次は東屋巻で、匂宮の姿を初めて目にした際の、浮舟の母中将の君の心理描写である。

わが継子の式部丞にて蔵人なる、内裏の御使にて参れり、御あたりにもえ近く参らず、こよなき人の御けはひを、あはれ、こは何人ぞ、かかる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時は、めでたき人々と聞こゆとも、つらき目見せたまはばと、ものうく推しはかりきこえさせつらんあさましさよ、この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、若宮抱きてうつくしみおはす。

中流貴族社会に生きてきた中将の君のこれまでの認識は、匂宮を直に見た瞬間、いっぺんに覆される。堅実な結婚相手を娘に望んでいたはずなのに、こんな高貴な方なら、七夕のように稀であっても、夫として通わせるのはすばらしいと思うのである。ここでは、男君の来訪にも

う舟は伴われていない。その後、薫に対面した中将の君は、匂宮を目にした時とまったく同様な思いを抱き、そこにも同じ表現が用いられている。

この母君、「いとめでたく、思ふやうなる御さまかな」とめでで、乳母ゆくりかに思ひよりにて、たびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて、少将をかしきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。

彦星は上流階級の高貴な男君をとえる表現として、宇治十帖世界に定着している。それは現実社会における中流階級と上流階級の人々の身分格差を表していた。中流階級の人々にとって、上流貴族は光り輝く星であり、年に一度しか逢瀬がなくても十分だと思われる存在だったのである。

長恨歌を想起させる七夕の用例、舟に乗った男君を彦星に見立てた用例、年に一度しか通うことのない七夕の状況を利用した例など、『源氏物語』の七夕の例は、平安時代に浸透していた七夕伝説および七夕歌を意識し、それを様々な面からとらえて十分に活用しているといえよう。

平安時代の散文作品では、『宇津保物語』を除いて、七夕の用例は一見少ないように見える。しかし、七夕伝説受容の痕跡は十分残されているし、七夕の宴で詠まれ続けた莫大な数の和歌が平安文学の背後に存在し、意識されていたことは間違いない。『万葉集』をはじめ、『古今集』以下の勅撰集および私家集に多く採られた七夕歌の流行を背景に、『伊勢物語』は七夕行事と関わりない場面に七夕歌を活用した。また、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』では、七夕伝説の逢瀬を自らの恋愛に重ね合わせて表現し、男君の心を動かした。『枕草子』には、平安時代の七夕行事を楽しむ人々の思いや、七夕歌享受の様子が記されていた。そして『源氏物語』が取り入れた七夕は、光源氏の人生の節目と最晩年、および宇治十帖の世界構築に機能した。以上、本稿では、古代日本に伝来し定着した七夕が、平安文学に様々な形で深く入り込んでいたことを、各作品の用例から改めて確認することができた。

注

- (1) 『懐風藻全注釈』辰巳正明 2012年 笠間書院刊
- (2) 『懐風藻』の本文は注1の文献により、現代語訳は稿者、『万葉集』本文は『日本古典文学全集』による。
- (3) 作者は渡来系の官人で、養老3年(719)正月に従五位下任官。医術をもって宮廷に仕えた。
- (4) 作者は沙弥しやみ(修行中の少年僧)だったが、還俗して山田三方と称した。学業に優れ、万葉歌人でもある。
- (5) 『万葉集』に、「天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ渡る見ゆ」(1018番歌)があり、『懐風藻』には、「月舟移霧渚(月の舟は霧の渚に移り)」(天武天皇)の詩句があるが、漢語に「月舟」の語はない。これについては、月に桂の木が生えているという中国の伝説(『初学

記』『酉陽雜俎』)による「桂月」と、「桂舟」(桂の木の舟)から発想されたのではないかと
も、また、旧暦7月7日の月が半月手前の下弦の姿で、ちょうど舟の形に似ていることによ
るとも考えられている。(前掲注1『全注釈』他)。

- (6) カササギは、『万葉集』『古今集』には詠まれず、『後撰集』『拾遺集』でも、各1首のみに
しか登場しない。
- (7) 『古今集』の本文は『新編日本古典文学全集』、『後撰集』『拾遺集』の本文は『新日本古典
文学大系』による。
- (8) 『宇津保物語』以下の物語および『枕草子』『和漢朗詠集』の本文は、すべて『新編日本古
典文学全集』による。
- (9) 紀有常の妹静子は惟喬親王の母で、有常の娘は業平の妻という関係にある。
- (10) 贈答歌の意味は次のようになる。(業平)「狩をして一日暮らした今日は織女さんに一夜の
宿を借りましょう。ちょうど天の川の河原に私は来てしまったのだから」(有常)「織女さん
は一年に一度訪れる人を待っているのだから、ここが天の河であっても、そう簡単に宿を貸
してはくれずまいよ」
- (11) 他の歌物語では、『大和物語』の天の川の歌は、天に尻を掛けたもので、これも七夕行事と
は関係が無い。
- (12) 『和漢朗詠集』に採られた菅原道真の七夕詩「露は別れの涙なるべし珠空しく落つ」が引か
れている。
- (13) この和歌は『伊勢物語』にも採られたが、先にみたように七夕とは無関係な状況に引かれ
ていた。それに対して『源氏物語』では、光源氏の状況に七夕伝説をうまく響かせている。